A. ドイツの旧歴史学派と新歴史学はの違いは何か。

B. 産業考古学とは何か。

ヨーロッパの経済の歴史は、まずイギリスのアダム・スミスから始まった。自由貿易主義によりイギリス社会経済は著しく発展し、イギリスはヨーロッパ近代経済社会の先進国となった。

このような歴史の中でドイツ経済社会は過去戦争で国が荒廃し著しく遅れていた。ドイツの国状に合わせて段階的に発展を想定する理論が生まれ、ドイツ歴史学派が誕生した。メーザーは「愛国的幻想」を著し、ドイツ歴史学派の源流を形成した。ドイツ歴史学派の思潮は以下のものである。

(1)人間を理性的存在よりも情緒的な存在として把握する。(2)抽象的な社会経済構造ではなく国家権力に順ずる国民経済を中心として思考する。(3)社会は商品交換市場を絶対視するのではなく国家・国民を中心としての各国民経済の個性を強調する。(4)啓蒙主義の歴史観の延長ではなく歴史事情を参考に国民経済の栄枯盛衰プロセスを理論づける歴史観。

ドイツ近代史と歴史学派の区別は以下のようになる。(1)中世以来の領封国家群立の時代：1840 年を中心とする歴史学派の先駆期、(2)ブルジョア的生産組織が興り国内統一市場が形成された時代：1870 年までの前期歴史学派、(3)国民経済統一を果たし、他の諸列強との競争に参画する時代：1870 年以降の後期歴史学派。

旧歴史学派は(1)～(2)に、新歴史学派は(3)に入るものと考えられる。旧歴史学派と新歴史学派の概要は以下のとおりである。

１．旧歴史学派：リストはドイツ歴史学派の先駆者と言われている。リストは国民の経済発展段階を 5 段階として(1)未開状態(2)牧畜状態(3)農業状態(4)農工状態(5)農工商状態と設定した。ドイツはそのうちの第４段階であるとし、ドイツ特有の経済発展の方法を確立しなければならないと主張した。当時のドイツは産業革命による工業化が押し寄せてきたが、国内では近代化の妨げとなる封建的束縛が多く残っていた。リストは国内的に市場の統合、対外的には自国産業育成のため保護貿易を主張した。リストの経済学は古典経済学への批判による国民経済学で、国民経済の発展段階の相違に十分注意を払うことを主張した。彼の政策として、小農主義、交通網・関税制度など国内流通機構の整備を提唱した。しかし、封建的な支配層の抵抗により独自の学派を形成するには至らなかった。1834 年ドイツ関税同盟が成立し、それ以降資本主義化が進展した。並行してドイツの政治的統一が進み、リストによって構築された歴史主義的な経済は支持者を増やした。次世代の W.ロッシャーは歴史研究を重要視し、国民経済を有機体とみなし国民経済学を社会医学と考えた。そして、独自な発展論を構築し、自然支配の時代、労働支配の時代、資本支配の時代と区分した。

２．新歴史学派：シュモラーはドイツ資本主義確立期に従来の立場を変えて自由主義者側に立った。1873 年にはドイツ社会政策学会を創立した。シュモラーは国家社会主義派と自

由主義改革派の間に立って国家主導の中産階級創設を説いた。ビューヒャーは社会政策から離れ経済史研究に重点をおいた。そして独自の経済発展の段階論を次のように表した。(1)封鎖的家内経済の段階(2)都市経済の段階(3)国民経済の段階。ウェーバーは社会政策学会で活躍し後にドイツ社会学会を創立した。彼は経済的な見方から世界文化史を研究し資本主義の経済・経営から自由労働、その合理的組織を持つ「市民経営資本主義」モデルを理想とした。

３．旧歴史学派と新歴史学派の違い：時代的に見ると旧歴史学派は 1840 年前から 1870 年代までである。ドイツ帝国の統一が進む時期であり、発展途上のドイツを育成するための保護貿易政策が取られた。その結果ブルジョアが台頭する。歴史主義的な経済学が支持される。歴史的発展段階論等、歴史理念の探求が主であった。一方、新歴史学派の年代は、ドイツ帝国発足後であり、工業化が進み労資の社会問題が興り、国による社会政策の必要性が問われた。前者の歴史主義には観念論的なところがあったため、文献資料の詳細を収集し実証的な歴史研究が行われ、本格的な社会経済史学が進んだ。一方で、倫理的側面も重視され、資本主義の弊害を緩和するため社会政策学会が設立された。

両者の違いは、利己主義的な考え方から国民的立場に立った資本主義を主張する点にある。資本家と社会主義勢力の融和を図りながらより良い資本主義経済を導いていくところにある。　　(B)